遭遇スル前歯ノ P.K. ノ破壊ハ非常ニ稀ナル事ガ解ル。又試験ノ結果 P.K. ノ切端ニ於テ軸ノ方向ニ重量ヲ加ヘタ場合ハ平均 82 Kg ノ壓ニ耐ヘ得ルガ齒冠舌面ノ中央部ニ於テ軸ノ方向ニ直角ニ壓ガ加ハル時ハ平均 68 Kg ノ壓ニ耐ヘ得ルニ過ギス、又齒冠部舌面ノ齒頸縁ニ近ケレバ近イ程壓ニ對シテハ陶材ノ破壊ハ容易ニ起ルト云ハレテ居ル、故ニ深イ被蓋咬合ハ P. K. ニ對シテハ適應シタモノデアルトハ云ヘナイ。而シカ、ル場合ニ P. K. ヲ作ラウトスルナラバ齒冠ノ舌側齒頸部ノ方ヲ齒齦中ニ出來ルダケ深ク削ツテ被蓋ノ接觸カラ遠ケル様ニスル。又其ノ部ノ陶材ノ厚サヲ増加サセル爲ニ舌側ノ結節ガ出來ル様ノ形成ヲスル必要ガアル、試験ノ結果 P. K. ノ壁ハ平均周圍ニ於テ 1-2 mm. 切端ニ於テハ 3mm. ナル様ニスルノガ適當ナル、著者ハ又其ノ試験ノ一部トシテ齒頸部ノ段階(Schulter)ノ無イ P. K. ニ對シテモ行ヘタ其ノ結果トシテ壓ガ P. K. ノ上方カラ軸ノ方向ニ加ヘラレタ場合ハ段階ノ有無ニ關セズ全ク同シ重量ニ耐ヘ得ル事ガ解ツタ。而シ此モノハ被蓋ノ深イ場合ハ前述ノ如ク齒頸部ノ周縁ガ薄ク作ラレテ居ル爲ニ適應シナイ。P. K. ヲ強固ナモノトスル爲ニハ以上ノ理由ヲ斟酌スル外陶材ノ壓縮ト適當ナル焼成溫度ニヨツテ其ノ強度ヲ本質的ニ高メラレルモノナル。又其ノ「セメント」裝著ニ際シ氣泡ヲ「セメント」層中ニ殘ス等ハ絶對的ニ避ケテバナラス、裝著ニ際シ對合齒トノ關係位置ヲ充分ニ形成セテバナラナイ。即チ P. K. ノ破壊ノ危險ガ點的ノ壓迫ヲ受ケタ際ノ面的ニ壓迫ニ於ケルヨリ遙カニ大ナル事ヲ實驗シ得タカラ臨牀上ニ於テモ亦此ノ試験ノ結果ヲ重要視スル必要ガアル。即チ齒冠裝著ニ際シテハ咬合紙ヲ咬マセテ、咬合齒トノ接スル所ヲ面的ニ至ルマデ形成スルノデアル。又對合齒トノ接觸面ガ餘リニ滑澤ナ「ガラス」化サレタ様ナ表面デ無イ方ガ咬合齒ノ磨耗ヲ起シ之ガ他ノ部ノ齒牙ノ生理的磨耗ト類似的ニ起ル爲ニ非常ニ必要ナ條件ナル。

(檜山)

矯 正 科

不正咬合ノ原因ト認メラル、巨大ナル舌 Übermäßige

Größe der Zunge als Ursache von Okklusionsanomalien.

K. Wachsmann und F. Neumann. Z. für St. S. 32. 1931.

巨舌症(Makroglossie)ヲ大別シテ脈管腫性巨舌症(Angiomatösen Makroglossie)ト筋肉性巨舌症(Muskulärer Makroglossie)トニ分ツコトガ出來ル。後者ハ主トシテ舌筋ノ肥大及ビ増殖ニ依リテ起ルモノデアル。著者ハ此ノ筋肉性巨舌症ガ如何ナル不正咬合ヲ誘起スルカニ就テ記載シテアル。著者ノ實驗例ハ殆ド全テニ於テ舌ハ一見シテ頗ル巨大デアリ且ツ齒牙ハ全ク定型のナ不正狀態ヲ呈シテワツタト報告シテアル。然シナガラ舌ノ大サヲ生體ニ於テ客觀的ニ決定スルコトハ不可能事ニ屬スルノデアル。ナゼナレバ第一ニ舌ノ形態ハ筋肉ノ收縮ニ從ツテ頗ル變化シ易ク第二ニハ正常ナル大サト云フモノガ未ダニワカツテアラナイカラデアル、從ツテ舌ノ大サヲ決定スルタメニハ主觀的ニ此レヲ行フ必要ガアル。

著者ハ巨舌症ニ依リテ起サル、不正咬合ノ狀態ヲ大別シテ3種トシテアル。

第一ノ場合ハ上下齒牙ノ被蓋ノ程度カ正常デアツテ即チ上顎齒牙(殊ニ前齒部)ガ下顎齒牙ヲ一定度被フテアル時ハ舌ノ肥大ニ依リテ上下齒窩ハ其ニ擴大セラレ各齒牙ノ間ニハ間隙ヲ生ジ前齒部ニ於テハ上下齒牙共ニ前突ヲ來スモノデアアル。此レガ巨舌症ニ依リテ誘起セラル、不正咬合ノ最も普通ナ形態デアアル。第二ハ下顎前突ヲ起ス場合デアアルガコレハ恐ラク前齒部ノ正常ナル被蓋ヲ缺除スルカ。下顎骨體ノ高サ、又ハ他ノ狀態ニ依リテ下顎骨ガ孤立セラル、タメニ其ノ骨體ハ巨大ナル舌ノタメニ常ニ前方ニ壓力ヲ受ケ遂ニ下顎ノ前突ヲ來スモノデアアルト稱シテアル。然シナガラ下顎前突ガ眞ニ巨舌ニ依リテ生ズルモノカ否カラ決定スルコトハ中々困難デアアル。

第三ハ所謂ユル開咬狀態デアツテ此レハ舌ノ一部分ガ上下齒牙ノ間ニ介在スルタメニ起ルモノデアアル。然シナガラ此ノ開咬ノ眞ノ原因ガ果シテ舌ノ大サニ依ルモノカ又通常ノ舌ヲ嚙ム癖ニ依リテ起ルモノナルカ或ハ又兩者ガ共ニ其ノ原因トナルカラ確定スルコトハ中々困難デアアルガ舌ヲ嚙ム癖ノミニ依ル場合ハ開咬狀態ニ於テモ各齒牙ノ間ニ間隙ヲ伴ハナイノヲ常トシ且ツ舌ノ大サニ注意スレバ其ノ原因ヲ或ル程度マデ確定スルコトガ出來ル。

猶ホ巨舌症ニ於テハ舌ノ表面ニ皺ヲ有スルヲ特徴トスル。且ツ又此ノ不正狀態ハ屢々遺傳スル傾向ヲ有スルト稱セラレテアル。

其ノ治療法トシテハ(Pichler, Augst 氏ニ依レバ)舌ヲ外科的ニ切除シテ(Keilexzision)小サクスルコトガ稱用サレテアル。Schendel 氏ハ巨舌症ニ前述ノ如キ外科的手術ヲ施シタ後前突セル下顎ハ極メテ速ヤカニ且ツ自發的ニ退化シタト報告シテアル。然シナガラ脈管腫性巨舌症ノ場合ハ前記ノ筋肉性巨舌症ノ手術ノ如ク簡單デハナイノデアアル。

然シ通常患者ハ巨舌症ヲ主訴トシテ我々ヲ訪ル、コトハ少ナイノデアツテ其大部分ハ全ク他ノ原因ニ依リテ來ルコトガ多イノテ從ツテ著者ノ症例モ前齒部ノ間隙ヲ陶材齒冠其ノ他充填等ニ依リテ補綴シタニ過ギナイト報告シテアル。(高橋)